

## 第1章

# グルジアのバラ革命 －「革命」にみる連続性\*－

前田 弘毅

### はじめに

#### シェヴァルドナゼ辞任

2003年11月23日、南コーカサス3国のひとつグルジアで、市民の抗議活動により大統領が辞任する事件が起こった。当時グルジアで大統領を務めていたのが、かつて旧ソ連の外務大臣として新思考外交を主導したシェヴァルドナゼ（シェワルナゼ）である。同月2日に行われたグルジアの総選挙は、開票作業が難航し、選挙結果改竄に対する大衆の抗議行動は次第に大きなうねりとなって、1992年以来グルジアを率いていたシェヴァルドナゼを政権の座から追いやった。開明的な指導者として世界的な名声を獲得していたシェヴァルドナゼの辞職を求めて国会議事堂を取り囲む群衆の姿は、世界中に大きな衝撃を与えた。この政変は、政権との軍事的な衝突を避けるよう抗議デモで非暴力の象徴として掲げられたバラにちなんで「バラ革命」と名づけられた。

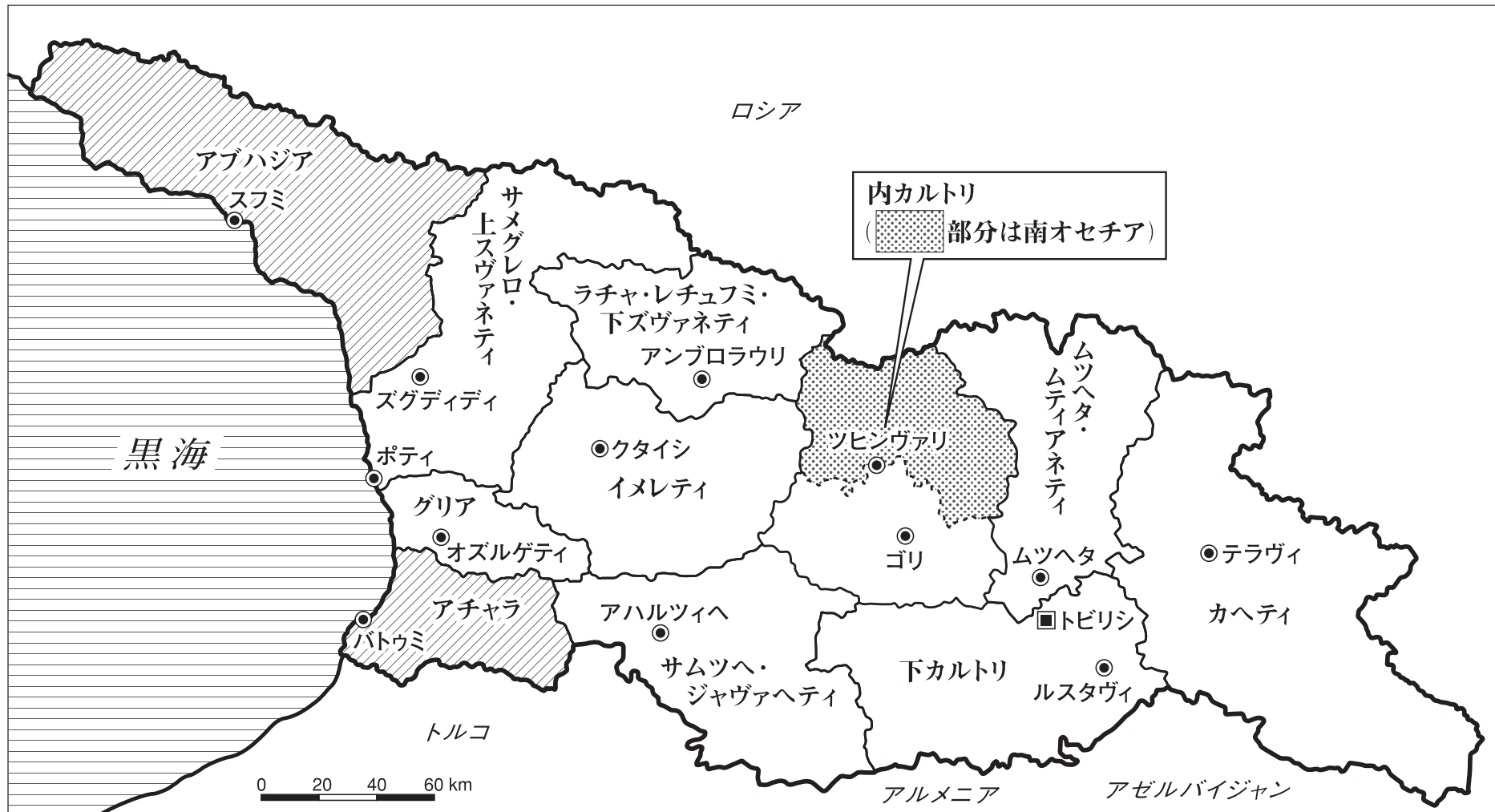
バラ革命が国際社会で大きな注目を集めた理由として、①ソ連解体以降、中央アジアやコーカサスで選挙を通じた政権交代がなされた例が極端に不足し、多くの国では十数年にわたって同じ指導者が権威主義的体制を維持している中で起こったこと、②ロシアのイワノフ外務大臣が仲裁に入るためにグルジアを訪問し、アメリカも選挙前からその結果について強い関心を示すなど、コーカサス地域への大国の影響力誇示がなされたこと、③抗議行動の先頭に立ち、シェヴァルドナゼ辞任後に実権を掌握した政治家が親欧米をうたう若手政治家であったことなどが挙げられよう。はじめにこうした「国際政治」というプリズムを通して観察されるバラ革命の見方について若干触れる。

#### バラ革命の衝撃

1980年代後半、冷戦の終結前後から、グルジアを含むコーカサス（カフカス、カフカース）地域は久しぶりに国際政治の表舞台に登場し、注目を集めるようになった。ナゴルノ・カラバフ紛

---

\*本稿は、日本国際政治学会（2005年11月18日、札幌コンベンションセンター）および国立民族学博物館地域研究企画交流センター連携研究「スラブ・ユーラシアの比較政治経済学—体制転換とその後」研究会（2006年1月29日、国立民族学博物館）で筆者が行った報告「バラ革命にみる多極化と求心力の相克」に加筆し、修正を施したものである。なお、巷間に流布するアメリカ陰謀説に反駁した拙稿「グルジア『バラ革命』—元祖民主革命が成就するまで」『国際問題』第544号、2005年、55-62頁（以下、前稿）と補完関係にあるので、併せて参照されたい。



## グルジア地方行政区分

[出典：(財)国際協力推進協会『グルジア』1999年]

争をはじめとして、ソ連を崩壊に導いた民族主義のマグマが激しい勢いで噴出し、各民族間の軍事衝突が頻発した。他方、1994年のバクーにおける「世紀の契約」から昨今のBTCパイプライン開通にいたるまで、世界のグレートパワーのエネルギー資源を巡る国際的駆け引きは、この中央ユーラシアの回廊の域内政治に現在まで大きな影響を与え続けている。さらに、近年では大文明圏の狭間に位置することから、いわゆる文明の衝突の最前線として、新たな不安定要素の拡大が指摘されている<sup>1</sup>。

このように、コーカサスを巡る地政学的枠組みの変化が国際情勢に与える影響が近年強調されている。バラ革命も、グルジア国内に留まらず、その後ウクライナなど旧ソ連諸国で相次いだ「民主化革命」の嚆矢として広く知られるようになった。また、2005年5月にアメリカ大統領としてはじめてグルジアを訪問したブッシュは、首都トビリシの自由（旧レーニン）広場で「イラクの紫革命・ウクライナのオレンジ革命・レバノンの杉革命」の魁としてバラ革命を高く評価する演説を行った<sup>2</sup>。すなわち、旧ソ連諸国内の政変としてだけではなく、より広い文脈で中東やユーラシア空間における政治変化胎動の兆しとして位置づけたのである。

こうした流れを受けて、東欧に連なるバルトから黒海沿岸の新たな「民主主義フロンティア」が注目を集めている<sup>3</sup>。南コーカサスはヨーロッパ近隣外交（ENP）の対象地域にも組み込まれた<sup>4</sup>。しかし、これは欧米が積極的に当該国の社会変化を求めた結果というよりも、対内的に欧米入りを訴える政権によりてこ入れを求められたという見方も出来る。グルジアの現大統領サアカシュヴィリは、大統領権限の強化や地方自治制限で批判的見解を出した欧州評議会を強く批判したこともあり、欧米に対し常に受身な姿勢をとるわけではない<sup>5</sup>。他方、ロシアも、旧ソ連空間における権益維持を打ち出しながら、強引な域内介入でかえってその威信を損ねている例も目立つ<sup>6</sup>。

---

<sup>1</sup> 統一国家が形成された歴史のないコーカサスは、独特の多民族社会を形成してきた。このことが、国家建設に当たってはマイナスに作用し、また、包括的な研究を困難としている。本稿の課題に関連する研究としては、邦文ではナゴルノ・カラバフ紛争を中心とする廣瀬陽子氏の一連の論文が詳しい。廣瀬陽子『旧ソ連地域と紛争：石油・民族・テロをめぐる地政学』慶応大学出版会、2005年。バラ革命以前の社会状況に関しては西村めぐみ『民主化以後の南コーカサス—戦略的利益と民主主義理念の相克』多賀出版、2005年も参考になる。

<sup>2</sup> 2005年5月10日付 Civil Georgia [<http://www.civil.ge/eng/print.php?id=9838>]。以下、URLは特記以外2006年5月5日現在有効。

<sup>3</sup> 2005年に駐グルジアアメリカ大使に就任したテフトは、かつて駐リトアニア大使を務めた。彼はグルジアに赴任する直前、「黒海地域における民主主義の将来」と題するアメリカ上院の公聴会でも報告を行っている。 [<http://www.senate.gov/~foreign/hearings/2005/hr050308p.html>]。2005年4月にモルドヴァで開催されたG8サミットでは、リトアニアやルーマニアの大統領も参加した。2005年4月28日付 Civil Georgia [<http://www.civil.ge/eng/print.php?id=9730>]。G8については廣瀬『旧ソ連地域と紛争』97-121頁参照。

<sup>4</sup> 拡大ヨーロッパについては、六鹿茂夫「欧州近隣諸国政策と西部新独立国家」『国際政治』第142号、2005年、95-112頁を参照。

<sup>5</sup> 2005年1月18日付 Civil Georgia [<http://www.civil.ge/eng/print.php?id=8822>]。

<sup>6</sup> 2005年11月11日付 Civil Georgia [<http://www.civil.ge/eng/print.php?id=11135>]。2004年秋のアブハジア大統領選挙でのロシアによる露骨な介入については、Oksana Antonenko, "Frozen Uncertainty: Russia and the Conflict over Abkhazia," in Bruno Coppieters and Robert Legvold eds., *Statehood and Security: Georgia after the Rose Revolution*, (Cambridge, MA: American Academy

したがって、コーカサスを巡る各国の眼差しは、必ずしも焦点の定まったものとはいえない。むしろ現地の情勢に時には振り回されながら、それぞれ距離を測りかねているようにも見える。しかし、複雑な地政学的環境を背景とする国際政治における力学関係ばかりに注目が集まり、グルジアなどコーカサス諸国は力のない客体として先行研究では無視されがちであった。

## 異なるロジック

本稿では、こうした「国際社会」からのアプローチではなく、グルジア現地の論理に注目して、バラ革命を位置づけることを目的にしている。その理由の一つは、先に見たようにアメリカがバラ革命を中東や中央ユーラシアにおける民主化に道をひらいたとして評価しているのに対し、当事者であるグルジアでは位置づけが大きく異なっていると思われることである。サアカシュヴィリはウクライナのオレンジ革命（第二章参照）に際して、諸手を挙げて歓迎し、ベラルーシのルカシェンコ政権については挑発的とも受け取れる言動を繰り返している。しかし、これはあくまで「欧州国家」グルジアのアイデンティティを意識的に発揚しようとするものである。

グルジア政府は、エネルギー戦略の命綱を握られている隣国アゼルバイジャンの政治状況については口をつぐみ、パートナーシップの強化を訴えるばかりである。また、カザフスタンやロシアに対しても国内の政治状況や民主化について発言を慎んでいる。このように、「民主化革命」という用語は、国際関係において当事者の間でも互いに異なるレトリックで用いられている。すでに六鹿は、モルドヴァを取り巻く国際環境がウクライナと相似していたにも関わらず革命が起きなかったことから、欧米の関与は長期にわたる緩やかな民主化プロセスにあり、国内環境こそ結果を左右することを看破している<sup>7</sup>。すなわち、バラ革命に至ったグルジア社会と政治の実態について本格的に検討する必要があるといえる。

たしかに、グルジアも地政学な要衝に位置し、資源に乏しい小国であることから、対外関係が大きな意味を持っていることは国内政治を観察する上でも前提となる。さらに、マトリョーシカモデルとも指摘されるナショナルな空間としての国家的枠組みが、旧ソ連の継承国家として歴史的に規定されている事実は否定できない<sup>8</sup>。他方、ソ連崩壊時の混乱や無血革命につながった 2003 年の政変を見ても、直接的な市民の示威行動は一定の民意を代表して、国政に決定的な衝撃を与えてきたのである。

---

of Arts and Sciences, 2005), pp. 205–269 参照。

<sup>7</sup> 六鹿茂夫「モルドヴァのオレンジ“発展”」『海外事情』53号、2005年、37–38頁。

<sup>8</sup> ソ連の擬似連邦制と擬似国民国家の論理は現在も CIS 諸国を縛り続けている。ソ連崩壊時、グルジア最大のマイノリティーは、アルメニア人（8.1%）であり、続いてロシア人（6.3%）、アゼルバイジャン人（5.7%）であった。現在は、アゼルバイジャン人 6.5%、アルメニア人 5.7%とされるが、いずれの人口もアブハズ人やオセット人の数を上回り、かつ一定の領域に集中的に居住しながら、自治の問題は半ばタブーとなっている。Gia Nodia, “Georgia: Dimensions of Insecurity,” in Coppieters and Legvold, *Statehood and Security*, pp. 39–82.

本稿の課題は、ソ連崩壊以降のグルジア政治の展開と歴史的経験を整理して考察することにある。すなわち、「民主化革命」の連鎖といったある種の（それ自体がイデオロギーとして効力を発揮しうる）見方から距離を置いて、より純粹にグルジア内政治の発展という観点からバラ革命を位置づけたい<sup>9</sup>。

## 1. シェヴァルドナゼ政治の功罪

### 1.1 シェヴァルドナゼの帰還

1989年4月9日、トビリシでソヴィエト政権に対する抗議集会を開いていたグルジア市民に向けて、ソ連軍が発砲し、当日少なくとも19人の市民が死亡した。ソ連末期に高揚したこの独立運動の先頭に立ったのが、1970年代のヘルシンキ・グループのリーダーであったズヴィアド・ガムサフルディア（父は高名な作家のコンスタンティネ・ガムサフルディア）である<sup>10</sup>。

英文学者のガムサフルディアは、スマートな容姿と激的なナショナリストぶりで大衆の人気を集めた。事件から半年後に行われた初めての自由選挙では、ガムサフルディアの率いる円卓会議が勝利を収め、事件からちょうど二年後の1991年4月9日にグルジアは独立を宣言した。翌5月にガムサフルディアは86%の高い得票率で初代大統領に選出されるが、1991年末に発生した軍事クーデターにより失脚した<sup>11</sup>。

ガムサフルディアを追放した軍事評議会を指導するキトヴァニ、イオセリアニ、スィグアは、政権の正当性を示すのに苦しみ、ペレストロイカ期にソ連の外務大臣を務めたシェヴァルドナゼ（シェワルナゼ）を翌1992年3月、国家評議会議長としてモスクワから招いた。1960年代以来、グルジア・ソヴィエト社会主義共和国内務大臣、党第一書記を歴任したシェヴァルドナゼは、1980年代末の民族運動高揚の流れとは基本的に無縁であった。ブレジネフ期の共産党指導者としての圧倒的なイメージと、独立初期の混乱に手を染めていないという失点の少なさから、シェヴァルドナゼは、この危機を救える唯一の安定した政治家として内外で広く認知された。1992年8月には国会議長が直接選挙で選出され、シェヴァルドナゼは96%の得票率で圧勝した。ここでは、ガムサフルディア、シェヴァルドナゼともに、事実上の信任投票であったことに注目したい<sup>12</sup>。

<sup>9</sup> 以下の著作は、ソ連崩壊後のグルジア政治の展開をつぶさに検証し、バラ革命についても冷静に分析を加えている点で出色といえる。Jonathan Wheatley, *Georgia from National Awakening to Rose Revolution: Delayed Transition in the Former Soviet Union* (Hampshire: Ashgate, 2005).

<sup>10</sup> 4月9日事件で火が点いたグルジア民族主義の熱情は、90年代当初のグルジア政治を大きく規定したと考えられる。事件後、グルジアでは、民族派と共産主義者は対峙するというより、民族的主張を互いに強調しながら事態が推移した。Wheatley, *Georgia from National Awakening*, pp. 62–63.

<sup>11</sup> Christoph Zürcher, “Georgia’s Time of Troubles, 1989–1993,” in Coppieters and Legvold, *Statehood and Security*, pp. 83–115 が参考となる。

<sup>12</sup> Jonathan Wheatley, “Elections and Democratic Governance in the Former Soviet Union: The Case of Georgia,” [[http://www.fu-berlin.de/oei/en/cscqa/downloads/jw\\_pub\\_boi.pdf](http://www.fu-berlin.de/oei/en/cscqa/downloads/jw_pub_boi.pdf)]; Wheatley, *Georgia from National Awakening*, pp. 75–76.

シェヴァルドナゼは 1993 年、アブハジア独立問題で軍事的な敗北を喫し、20 万人以上とされる国内難民の発生により大きな危機に直面した。しかし、CIS 加盟やロシア軍基地の存続を認めることで、ロシアとの協調路線に舵を切り、ガムサフルディア派の武装蜂起を鎮圧して、求心力を回復した<sup>13</sup>。その後、極端な民族派と軍閥勢力の排除に成功し、安定と秩序の守護神のイメージをより強固なものとしつつ、1995 年には大統領に就任して、ようやく混乱期に終止符を打つことに成功する<sup>14</sup>。

## 1.2 シェヴァルドナゼ外交

シェヴァルドナゼ政治を特徴付けるのは、現実主義であり、これは特に対外政策に顕著に現れた。新思考外交の中で確立した名声を生かし、西側の援助をひきつけることは国民の希望にかなったが、当初はロシアを頼った事実も忘れてはならない。アブハジアの敗北を受けて現実主義者のシェヴァルドナゼは、まず、ロシアとの関係の正常化に努め、第一次チェチェン戦争でも積極的にロシアを支持した<sup>15</sup>。さらに、1998 年春までかつてグルジア駐留ロシア軍の副司令官であったヴァルディコ・ナディバイゼが国防大臣を務めた<sup>16</sup>。しかし、ロシアは自らの内部の意思統一ができていない状態になく、アブハジアや南オセチアといったグルジア国内の紛争は事実上氷結化した。

こうした状況の中、経済的な支援を獲得する目的もあって、シェヴァルドナゼは次第に欧米への傾斜を強めていった。1998 年には欧州評議会加盟に続いてパイプラインルート誘致に成功し、翌年には CIS 安全保障条約からも脱退した。同時期にナディバイゼに替わってかつて民兵司令官だったダヴィト・タヴザゼが国防大臣に就任し、NATO 加盟の希望をたびたび表明するようになる<sup>17</sup>。1999 年、イスタンブルで開かれた OSCE サミットでロシア軍の基地撤退と BTC パイプラインのルートが決着したことは、国際的な地政学的環境を十分に生かして軍事とエネルギーという外交の二本柱を追求した独立グルジアの外交的勝利であり、シェヴァルドナゼの絶頂であった。

しかし、この時期以降、相次ぐ国際的な危機に対するシェヴァルドナゼの判断は迷走する。第二次チェチェン戦争での曖昧な態度はロシアとの関係修復を不可能にただけでなく、9・11 以降のアメリカの対テロ戦争とも相容れないものだった。時期が前後するが、コソボ空爆でのヨーロッパ支持は、NATO 接近の意義を持ったとしても、領土統合の観点からはむしろ逆効果となる。こうして、アメリカとロシア、ヨーロッパの間でグルジアは単なる外交の客体として埋没していき、存在感の低下によってシェヴァルドナゼの統治体制にもひびが入ることになった。ここには、

---

<sup>13</sup> 1993 年 12 月 31 日、ガムサフルディアは、西グルジアの隠れ家で自殺したとされるが、その死については謎が多い。Wheatley, *Georgia from National Awakening*, p. 84.

<sup>14</sup> 1995 年 11 月 5 日、シェヴァルドナゼは 74% の得票率で当選した。Zürcher, “Georgia’s Time of Troubles,” p. 97.

<sup>15</sup> Antonenko, “Frozen Uncertainty,” p. 222.

<sup>16</sup> David Darchiashvili, “Georgian Defense Policy and Military Reform,” in Coppieters and Legvold, *Statehood and Security*, pp. 17–151. 特に 130 頁参照。

<sup>17</sup> Darchiashvili, “Georgian Defense Policy,” p. 31.

実利優先のきわめて現実主義的な政治が、一貫性のない日和見主義に転じていく怖さを見て取ることができる。

### 1.3 国内政治の齟齬

現実主義者としてのシェヴァルドナゼが、国内政治の発展において果たした役割も大きかった。緑の党の指導者であったジュヴァニアは、シェヴァルドナゼに認められ、与党市民同盟のリーダーとして1995年には弱冠31歳で国会議長に就任した。ジュヴァニアを通して若い世代の政治家を発掘し(その中には現大統領サアカシュヴィリも含まれる)、その保護者として振舞うことで、シェヴァルドナゼは、清新な指導者としてのそのイメージを内外に増幅させることに成功したのである。

また、シェヴァルドナゼ統治下のグルジア国内は、政府に批判的なメディアも機能し、それなりに多元主義が保障されていた。ただし、これはシェヴァルドナゼのバランス感覚と裏表一体であり、若手は行政府や議会で重用されたが、地方統治や行政職のトップは旧共産党系エリートに委ねられていた<sup>18</sup>。また、シェヴァルドナゼは、改革派として知られる若手政治家から腐敗政治の元凶として執拗に非難された内務大臣タルガマゼを決して罷免しようとはしなかった。

実際、長期にわたる経済危機によって社会全体に腐敗は蔓延していった<sup>19</sup>。こうした状況下、経済セクターにおいては、携帯電話会社を経営するシェヴァルドナゼの娘婿や、幅広くビジネスを手がける甥など大統領親族の派手な活動がたびたび話題となった。しかし、政治同様、経済でもシェヴァルドナゼは様々なネットワークに分化した腐敗構造の頂点にのり、調停者としての役割を演じるも、一括して掌握しようとはしなかったようである<sup>20</sup>。

こうして、少なくとも表面的には、政治・経済におけるシェヴァルドナゼ一極の傾向が過度に進んだ。独立以降、停電など社会全体の危機的状況が解消されない中でも、シェヴァルドナゼと利害が一致しない勢力は、ガムサフルディア派のように息を潜めるか、アチャラ(アジャリア)自治共和国で独立君侯のように振舞うアバシゼの傘下に入るかの選択しか持ちえなかった。野党第一党の復興党は、アバシゼと、シェヴァルドナゼ政権中枢に入り損ねたエリートの集合体に過ぎず、特定の政治理念を示したわけではない。したがって、民主的制度は保障されながら、選択肢は極端に不足しており、その中で社会エリートの分裂・分節化が進行していったと考えられる<sup>21</sup>。

---

<sup>18</sup> イメレティ知事シャスィアシュヴィリや首相格の国務大臣を務めロルトキパニゼらが挙げられる。Jonathan Wheatley, "Group Dynamics and Institutional Change in Georgia: A Four-Region Comparison," [http://www.oei.fu-berlin.de/cscca/data/jw\_prop.pdf]. 「安定は、かつての共産党エリート nomenclatura と「闇経済エリート」有力者の忠誠を買収することでもたらされた」 Wheatley, *Georgia from National Awakening*, p. 103.

<sup>19</sup> 税率が不自然に高く設定される一方、実際の税収はこれも不自然なほど低かった。必然的に賄賂や猟官が蔓延して行ったと考えられる。Wheatley, *Georgia from National Awakening*, pp. 104-109.

<sup>20</sup> シェヴァルドナゼ時代、役人の生活は汚職による収入に依存していたが、それをコントロールする中心が存在したとは必ずしも考えられない。グルジアの政治学者ノディアは次のように述べている。「グルジアの経済資本は唯一の新世襲ピラミッドに構造化されていたわけではない」 Nodia, "Georgia," p. 68.

<sup>21</sup> 民主的制度の中で権威主義がはびこる、本質において非競争的な「ハイブリッドな政治体制」につい

バランス維持を主眼とするシェヴァルドナゼは、2001年秋に若手政治家が下野し、与党市民同盟が事実上解体した後は、積極的な支持母体確立には無関心であり続けた。

シェヴァルドナゼは法的制度的枠組みと若手の登用によって、「民主政治」を自ら保障したと考えたのかもしれない。しかし、結局のところ、国外から援助を引き出し、分配バランスの頂点に立つという構造と、グルジアの家族支配的環境との結合は、ソ連時代となんら変わらないポスト政治の復活に過ぎなかった。ただし、かつてのソ連期のように、「地方君主」として振舞うだけの余力は用意されなかった。啓蒙者かつ国内外の権益の調整者としてのシェヴァルドナゼの資質もやがて損なわれていき、縁故社会の中で選択肢が一つしかない政治経済構造、すなわち一元的な支配とエリート内での多極分化が同時に進行した。こうしたカオス民主主義とでも呼ぶことのできる状態は、政治と社会のモラルハザードを引き起こし、シェヴァルドナゼについていた政治家も現状打破を求める市民の声の高まりを無視できなくなっていったのである<sup>22</sup>。

## 2. バラ革命を振り返る

### 2.1 サアカシュヴィリ登場

八方塞がりの状況の中、社会の不満は鬱屈し、2003年11月23日のバラ革命の日に向けて、情勢は流動化していった。2001年秋、若手政治家としてかねてより注目を浴びていたサアカシュヴィリ法相は、シェヴァルドナゼ政権の汚職体質を痛烈に批判して閣外に去った。さらに、反政府的報道が目立ったテレビ局ルスタヴィ2が家宅捜査された際には、ジュヴァニア国会議長が内務大臣交代を促して、自ら議長の職を退き、シェヴァルドナゼから離反した<sup>23</sup>。このルスタヴィ2事件では、特に反対運動の先頭に立った自由研究所のギガ・ボケリアが、後にクマラ（「もう、たくさんだ！」）の設計者となるなど、バラ革命に直接影響を与えた<sup>24</sup>。2001年の出来事は、すでに2005年の大統領選挙をにらんだシェヴァルドナゼ後継を巡る動きとして注目されていた。すなわ

---

ては以下を参照: Steven Levitsky and Lucan A. Way, “The Rise of Competitive Authoritarianism,” *Journal of Democracy*, Vol.13, No.2 (April 2002), pp. 51–65.

<sup>22</sup> 「カオス民主主義」の用語は、グルジア東洋学研究所所長サニキゼ博士より教唆を得た。2005年夏、北海道大学スラブ研究センター21世紀COE外国人研究員として来日されたサニキゼ博士には、多くの示唆を賜った。この場を借りて深く感謝したい。

<sup>23</sup> 拙稿「グルジア—「独立」という名の苦悩」『アジア研ワールド・トレンド』79号、2002年、24–27頁、及び「コーカサス展望 2003—グルジアを中心に」『中央アジアを知る』ACF 講座講演集 Vol.5、アジアクラブ、2004年、27–46頁参照。

<sup>24</sup> 自由研究所は、1996年、ルスタヴィ2で活動していた二人のジャーナリスト、ボケリアとレヴァン・ラミシュヴィリによって設立された。Wheatley, *Georgia from National Awakening*, p. 146. 革命後の2004年2月に、ボケリアは民主化運動の指導者としてブッシュ大統領から直接激励された。Jeremy Bransten, “Eastern Europe: Democracy Activists Cite Bush's Support for Their Efforts,” 2004年2月3日付 RFE/RL [<http://www.rferl.org/featuresarticle/2005/2/399234D0-771B-4C72-A6DD-BCD3A08AFFFD.html>]. 現在、ボケリアはサアカシュヴィリ与党の有力指導者の地位にある。

ち、2003年11月に起きたバラ革命は、グルジアにおける国内政治展開の一連の動きの延長線上として捉えられなければならない<sup>25</sup>。

このように、政局が混乱する中、サアカシュヴィリ元法相は、その存在感を際立たせていった。キエフ大学を卒業した後、アメリカのコロンビア大学等で法律の勉強を続けたサアカシュヴィリは、1995年、ジュヴァニアの説得に応じて帰国し、直後に国会議員に選出された。そして、憲法・司法・法律委員会委員長（1995～98年）や与党会派リーダー（1998～99年）、法務大臣（2000～01年）を歴任した。この間、欧州評議会議員会議副議長（2000年）を務めるなど若手政治家として国内外の注目を集めている。オランダ人の妻をもち、英語に堪能なサアカシュヴィリは、シェヴァルドナゼもかつてアピールした国民の西欧志向にマッチする人材であった。

## 2.2 バラ革命への道

法相辞任後、サアカシュヴィリは国民運動党を立ち上げた。2002年6月に行われた統一地方選挙において、同党は大躍進を遂げ、サアカシュヴィリはトビリシ市議会議長に就任した。この選挙では、投票前から不正選挙を警戒する声をジュヴァニアやサアカシュヴィリが発し、実際に再選挙が地方都市で続き、さらにトビリシでの一旦決まった票の数えなおし作業が中止となるなど、大きな混乱が続いた<sup>26</sup>。こうした選挙を巡る様相にもシェヴァルドナゼは動じなかったが、反対派勢力の伸張と統治機構の麻痺状態が並行して進んでいったことで、シェヴァルドナゼは結果として翌年秋の総選挙とバラ革命へ至る政変劇の舞台を提供してしまったともいえる。

かつてシェヴァルドナゼ政権の若手ホープとして首都トビリシの選挙区から出馬した際には「汚職なしのグルジア」を掲げて戦ったサアカシュヴィリは、その後「シェヴァルドナゼなしのグルジア」へと巧みにスローガンを移し、2003年の国政選挙の主導権も握った。さらに、サアカシュヴィリはナショナリズムを鼓舞し、ガムサフルディア派などの取り込みに励んだ。一方、同じく親米派若手政治家の中心人物ジュヴァニアは、シェヴァルドナゼ政権のナンバー2としての過去のイメージに苦しみつつ、国会議長として培った人脈からブルジャナゼを立てた「ブルジャナゼ—民主主義者党」を指導して、より穏健な政権交代を図った。

---

<sup>25</sup> ルスタヴィ2 家宅捜査にいたる主要因としては、グルジア政府とチェチェン兵の協力関係を巡る報道と、ルスタヴィ2の看板ジャーナリスト、ギオルギ・サナイアの暗殺というスキャンダルがあった。本稿では詳細に述べる余裕はないが、グルジアの国内政治は、国際的な環境と結び付けて考えなければならないことは自明である。拙稿「グルジア—「独立」という名の苦悩」も参照のこと。

<sup>26</sup> トビリシにおける選挙結果として、以下に政党と指導者、得票率と獲得議席を挙げる。労働党（シャルヴァ・ナテラシュヴィリ）25.5%（15議席）、国民運動・民主戦線（ミヘイル・サアカシュヴィリ）23.75%（14議席）、新右派（ダヴィト・ガムクレリゼ）11.36%（6議席）、キリスト教保守党（ズラブ・ジュヴァニア）7.27%（4議席）、産業がグルジアを救う（ギオルギ・トパゼ）7.13%（4議席）、再生21（アスラン・アバシゼ）6.34%（3議席）、統一（ジュンベル・パティアシュヴィリ）4.13%（2議席）。2002年6月10日付け Civil Georgia 参照 [http://www.civil.ge/eng/print.php?id=2058]。ただし、多くの国会議員が市議会議員候補に名前が挙がっていたことや、票の数えなおしを巡る裁判が長引くなどして、実際には市議会を開くためには更に4ヶ月を費やした。

対するシェヴァルドナゼ与党は、トビリシ市議会選挙で、4%に達せず一議席も獲得できないという大敗北を喫しながら、責任者ジョルベナゼ首相はバラ革命時まで続投した<sup>27</sup>。シェヴァルドナゼは、総選挙に向けて、かつてアバシゼと組んでいたルチュウリシュヴィリ率いる社会党や、チャントゥリア（1994年暗殺）の妻イリナ・サリシュヴィリが党首を務めていた国民民主党など、かつての反対派を自派の選挙ブロック「新しいグルジアのために」に取り込んで行った。このように、それまでの反対姿勢を一変させてなびく勢力を前に、シェヴァルドナゼは、ジュヴァニアやサアカシュヴィリの離反を真剣に受け止めていなかった可能性も強い。

このように、シェヴァルドナゼは野党勢力の無節操な取り込み走り、強引な多数派工作を行った。しかし、その一方で、サアカシュヴィリとジュヴァニアも路線対立を続けてまとまることはなかった。その結果、アチャラの権力を牛耳るアバシゼ・シンパを含めて、総選挙は4つ巴のまま迷走した点にも注意する必要がある。すなわち、「民主派」対「権威主義大統領とその支持者」といった二項対立の流れでグルジアのバラ革命を解釈することは、実際の選挙の流れに即するならば、誤りである。

それでは、最終的に革命の勝利者となったサアカシュヴィリを押し上げた要因はどこにあったのだろうか？アメリカの監視圧力が強まる中<sup>28</sup>、次第にロシアへ傾斜するシェヴァルドナゼに対して、ジュヴァニアとサアカシュヴィリは親西欧路線を早くから明確にしていたが、サアカシュヴィリは、一方で弁舌に巧みなナショナリストとしての側面を前面に打ち出していったのである。これは、より穏健な立場をとるジュヴァニアとの差異化を明確にして、より強固な支持の獲得を目指したものであったと考えられる。

### 2.3 なぜ11月23日か？

2003年11月2日に行われた総選挙は、開票結果を巡って迷走を始めた。開票結果に強い疑念を呈し、政権による不正行為を訴えるサアカシュヴィリは、次第に抗議のボルテージを上げていった。そして、抗議行動が盛り上がる中、グルジア西部サメグレロの中心地ズグディディからトビリシへ向けた行進をサアカシュヴィリはグルジア市民に呼びかけた<sup>29</sup>。

サメグレロの住民メグレリ人は、標準グルジア語とは意思の疎通ができない言葉（語族は共通）を話す<sup>30</sup>。彼らはマイノリティがしばしばそうであるように、強烈なグルジア民族主義者を輩出し

<sup>27</sup> ジョルベナゼは、地方選挙で惨敗した直後の6月30日には、大統領派のグルジア市民連合議長に選出され、シェヴァルドナゼも大統領後継への指名を滲ませた。2002年6月30日付け Civil Georgia [http://www.civil.ge/eng/print.php?id=2183]。

<sup>28</sup> グルジアに対するアメリカの「期待」と監視圧力については、前稿58-59頁参照。

<sup>29</sup> Jean-Christophe Peuch, "Georgia: Opposition Prepares to March on Capital as Government Allies Occupy City Center," 2003年11月19日付 RFE/RL [http://www.rferl.org/features/2003/11/19112003182220.asp]。

<sup>30</sup> 語尾が a で終わる苗字に特徴がある。ただし、一口にメグレリ人といってもトビリシ育ちの場合はメグレリ語を理解しない場合も多い。また、グルジア正教会の信者であることから独自の文語は持っていない。したがって、ある固定的な一枚岩の民族集団を想定することは誤りである。なお、アブハ

てきた。その代表格が初代大統領ズヴィアド・ガムサフルディアであり、メラブ・コスタヴァ（ソ連末期の独立運動の指導者で謎の事故死を遂げた）であった。また、メグレリ人の中心都市ズグディディは、シェヴァルドナゼが失ったアブハジアからの難民の町でもある。したがって、ズグディディからの行進は、シェヴァルドナゼの失点を強調し、民族主義を鼓舞する高度に政治的なパフォーマンスであった。

同じ頃、グラム・アブサンゼ率いる一団がズグディディ市長舎になだれ込んだ。アブサンゼは元ガムサフルディア政権の財務大臣で、シェヴァルドナゼ暗殺未遂の罪で投獄された経験もある。彼は、この時点では、国外から資金援助を受けているとして、サアカシュヴィリとの協力を否定した。しかし、後にサアカシュヴィリ政権で国民和解問題を担当する閣僚に就任した<sup>31</sup>。西欧で教育を受けた国際派政治家の側面と頑固なナショナリストという一見相反するサアカシュヴィリの持つ両面は、それぞれ有効に機能したのである。

バラ革命の成就した 11 月 23 日という日付にも大きな意味があった。この日はギオルゴバと呼ばれるグルジアの守護聖人聖ギオルギ（ゲオルギウス）を記念する祭日である。そして、バラ革命から遡ることちょうど 15 年、1988 年 11 月 23 日には、ガムサフルディアがグルジアの民族派の力を示すために南オセチア自治州都ツヒンヴァリで示威行動を行った<sup>32</sup>。3 万人を動員したガムサフルディアはこの出来事から指導者として大きな浮揚力を得たが、民族紛争の原点として負の遺産も大きかった。しかし、サアカシュヴィリはそうしたマイナス面に躊躇することなく、民族の熱情に訴えたのである<sup>33</sup>。巷に流布する陰謀論とは裏腹にアメリカが最終局面まで政変に対して慎重であったのは、サアカシュヴィリの扇動的な政治姿勢による民族主義の暴発と内戦を危惧した可能性もある。結果的にこうしたサアカシュヴィリの対決姿勢は功を奏し、最後の局面ではアメリカとロシアが協調して介入し、シェヴァルドナゼは辞任に追い込まれることになった。

---

ジアと接し、紛争の際の難民の大部分がメグレリ人であったことも、アブハジア紛争の複雑さを際立たせた。Nodia, "Georgia," p. 64 参照。

<sup>31</sup> 2003 年 11 月 14 日付 Kavkaz Center [<http://kavkazcenter.com/eng/content/2003/11/14/1958.shtml>]; 2004 年 2 月 17 日付 Civil Georgia [<http://www.civil.ge/eng/print.php?id=6227>].

<sup>32</sup> Zürcher, "Georgia's Time of Troubles," p. 91; Wheatley, *Georgia from National Awakening*, pp. 46–47.

<sup>33</sup> ちなみに、ガムサフルディアは、1990 年 5 月 31 日にはじまったトビリシ大学の学生によるハンガーストライキにも影響力を行使し、当局との交渉を有利に進めたといわれる。Wheatley, *Georgia from National Awakening*, p. 51. したがって、バラ革命における学生運動家の活用を、アメリカによる「セルビアシナリオ」に基づく陰謀論の根拠として用いることにも慎重でなければならない。もちろん、陰謀論全てを否定する必要はないが、この 15 年間のグルジア政治の激動の中で、軍事的手段を含む多くの物理的実力行使の例が観察されることも事実である。なお、ウィートリーも、アメリカの団体がサアカシュヴィリやジュヴァニアをベオグラードに招いたことにも触れている。Wheatley, *Georgia from National Awakening*, p. 179.

## 2.4 革命指導者たち

シェヴァルドナゼはロシアのイワノフ外相の仲介の元、反対派の有力者 3 人と会談し、その後辞任を表明した。この 3 人が野党「国民運動党」党首ミヘイル・サアカシュヴィリ、野党「ブルジャナゼ—民主主義者党」指導者のズラブ・ジュヴァニア、同じ政党の指導者で国会議長のニノ・ブルジャナゼである。彼らはバラ革命の指導者として国外でも勇名を馳せたが、3 人ともかつてシェヴァルドナゼに重用され、その後離反した経歴は共通するものの、シェヴァルドナゼ体制との距離のとり方は三者三様であった。

これまで見てきたように、強硬な姿勢を常に貫いたサアカシュヴィリに対して、人気で劣るジュヴァニアはより融和姿勢を示していた。また、父親がシェヴァルドナゼの引きでグルジアきつての有力実業家にのし上がり<sup>34</sup>、夫バドリ・ビツァゼも次長検事であるブルジャナゼにいたっては、選挙結果の見直しを強く求めながらも、大統領の辞任については明確な態度を示さなかった。

したがって、実際には、この 2003 年秋の総選挙で開票作業が始まったころ、選挙不正糾弾への動きが当初からそれほどの盛り上がりを見せたわけではなかった<sup>35</sup>。選挙敗北の責任の所在も追及せず、分離傾向により評判の著しく悪かったアバシゼを頼みとするシェヴァルドナゼの求心力は急速に失われ、新たな内戦の危険が現実の脅威となった<sup>36</sup>。とりわけ、最終的に公表された選挙結果では、アバシゼの再生党が他の予測に比べて図抜けて得票率を増し、サアカシュヴィリの国民運動等を押しのけてシェヴァルドナゼ与党に続いて、第二党に躍り出た<sup>37</sup>。こうした場当たりのな対処法に終始するシェヴァルドナゼをパフォーマンスに秀でたサアカシュヴィリという若手指導者が一気に呵成に追い込んでいく姿に、冷めた視線の諸外国がそれぞれの思惑を持って、混乱収束を図ったと考えられる。これが、曖昧な民主国家グルジアにおける幸運なバラ革命の顛末であったと考えられる。この「フェスティバル」のスターこそ、久しく渴望されていたナショナルな政治家の新星ミヘイル・サアカシュヴィリであった。

---

<sup>34</sup> George Sanikidze, “Georgian “Rose Revolution”: Causes and Effects,” *Caucasus and Central Asia Newsletter*, Issue 5 (Winter 2004), pp. 8–14 [<http://ist-socrates.berkeley.edu/~bsp/caucasus/newsletter/2004-05ccan.pdf>].

<sup>35</sup> 例えば、以下の記事を参照。Jean-Christophe Peuch, “Georgia: President Likely to Remain Unaffected by Election Setback,” 2003 年 11 月 4 日付 RFE/RL [<http://www.rferl.org/features/2003/11/04112003172215.asp>].

<sup>36</sup> Charles H. Fairbanks, Jr., “Georgia’s Rose Revolution,” *Journal of Democracy*, Vol. 15, No. 2 (2004), pp. 110–124.

<sup>37</sup> グルジアにおける 2003 年議会選挙と 2004 年大統領選挙については、以下の報告書に詳しい記述がある。The London Information Network on Conflicts and State Building, “Crisis and Renewal in Georgian Politics: The 2003 Parliamentary Elections and 2004 Presidential Elections,” January 2004 [<http://www1.uni-hamburg.de/Ethnologie-Kaukasus/html/aktu/crisis.pdf>].

### 3. サアカシュヴィリ政権の特徴：ジュヴァニアの死まで

#### 3.1 イメージ戦略と軍事レトリック

サアカシュヴィリ政治の特徴はその巧みなイメージ演出戦術と軍事レトリックにある。2004年1月24日、大統領就任式において、中世グルジアの国土を統一したバグラト朝のダヴィト4世建設王（在位1089～1125年）の墓のあるゲラティ聖堂（世界遺産にも指定されている）を訪れ、国家再建を内外にアピールした。5月26日の独立記念日に向けて新国旗・国歌・国章をそれぞれ制定したが、この日に「グルジア過去最大の」軍事パレードを行い<sup>38</sup>、その後も強い国家としてのグルジア「復活」をたびたび強調している<sup>39</sup>。また、ガムサフルディア初代大統領の名誉回復に努めている点も、反シェヴァルドナゼとグルジア民族主義の観点から注目される<sup>40</sup>。

さらに、サアカシュヴィリは自らの腹心を治安関係の要職に配置して、強権を振るう体制も整えていった。まず、司法大臣在任中に副大臣を務めたオクルアシュヴィリを検事総長に任命してシェヴァルドナゼ政権高官やその親族を逮捕し、財産を押収した<sup>41</sup>。オクルアシュヴィリはその後、内務大臣を経て国防大臣を務めている<sup>42</sup>。また、2001年の政変で、ジュヴァニアではなくサアカシュヴィリについての数少ない与党政治家であったメラビシュヴィリも、国家安全保障会議書記、保安大臣を経て、内務省（保安省と統合）を現在統括している。国防大臣を務めた後、国家安全保障会議書記を経て、2005年10月に外務大臣に任命されたベジュアシュヴィリ、保安大臣を経て現在まで検事総長を務めるアデイシュヴィリと併せて、国防・治安関係の要職はサアカシュヴィリ側近が押さえている。

---

<sup>38</sup> 2004年5月21日付 [<http://www.civil.ge/eng/print.php?id=6982>]及び同年5月26日付 Civil Georgia [<http://www.civil.ge/eng/print.php?id=7009>].

<sup>39</sup> もっとも、彼のレトリックには、ブッシュへの傾倒とともに、ソ連的アナクロ思考が見え隠れすることは指摘しておかなければならない。就任式で述べた「われわれは古いヨーロッパ人であるだけでなく、古代ヨーロッパ人である」という発言は、ヨーロッパへの熱情とラムズフェルド国防長官発言への比喩としても、誇大妄想的である。同様に、2005年夏、ウクライナのユーシチェンコ大統領と共同で企画したウクライナ・グルジア若者の合同サマーキャンプを「若き十字軍兵士たち」と名づけた。Nodia, “Georgia,” pp. 79–80.

<sup>40</sup> Jean-Christophe Peuch, “Georgia: Leader Walks Thin Line between Patriotism and Nationalism,” 2004年4月9日付 RFE/RL [<http://www.rferl.org/featuresarticle/2004/04/3d5cb438-670c-4612-be6b-085d91a0b271.html>].

<sup>41</sup> シェヴァルドナゼ政権の内務大臣、エネルギー大臣をはじめ逮捕者は多数にのぼる。シェヴァルドナゼの娘婿で携帯電話会社を経営していたジョフタベリゼは、2004年2月20日、トビリシ空港で逮捕された。2ヵ月後に釈放されたが、700,000ラリの脱税容疑に対し、約4倍の15,500,000ドルを妻のマナナ・シェヴァルドナゼが自発的に支払った。2004年4月26日付 Civil Georgia [<http://www.civil.ge/eng/print.php?id=6771>].

<sup>42</sup> オクルアシュヴィリの経歴については、[<http://www.parliament.ge/gov.ministries>]を参照。彼は重点的に予算が配分されている国防省のトップを「グルジアが再統一するまで」任されることになっている。革命後、国防費はシェヴァルドナゼ末期の10倍以上に急増した。Darchiashvili, “Georgian Defense Policy,” p. 146.

### 3.2 ジュヴァニアとの双頭政治

このようにパフォーマンスと冒険主義を得意とする大統領を実務面で支えたのが2005年2月にガス中毒で急逝するまで首相を務めたジュヴァニアであった。革命時には国会議長で暫定大統領となったブルジャナゼとあわせて三頭政治といわれたが、サアカシュヴィリ政権初期を特徴付けたのは、実際にはジュヴァニア首相の強大な権限と、双頭政治ともいえる権力の分担にあった<sup>43</sup>。

ジュヴァニアが特に力を注いだのは、民営化など経済セクターの発展へ向けた施策である。これは、健全な国家機能を果たすには何より資金的裏づけが必要であるという現実主義・実務的政治家であったジュヴァニアらしい選択であった。彼はロシアからオルガルヒの一人として知られるベンドゥキゼを内閣に招聘し、積極的な民営化政策を進めた。海外からの直接援助と脱税の摘発、民営化により、税収は飛躍的に伸び、公務員の給与も急増した<sup>44</sup>。

サアカシュヴィリにとって、グルジア政界に自らを引き入れた恩人でありながら、一度は袂を分かったジュヴァニアとの関係は微妙であった。さらに、サアカシュヴィリの側近であるオクルアシュヴィリがツヒンヴァリ、メラビシュヴィリが南西部出身で、トビリシ出身のインテリで周囲を固めていたジュヴァニア閣とはだいぶ個性が異なっていた<sup>45</sup>。しかし、ジュヴァニアは90年代半ば以来、国政のナンバー2として絶大な権力を握ることで、グルジア政治のパターンを熟知しており、サアカシュヴィリにとっても絶対的に必要な人材であったと考えられる。それは、まさに大統領就任後まもなく行われたやり直し議会選挙の結果から読み取ることが出来る。

### 3.3 勝利独占の方程式

サアカシュヴィリは大統領選挙のさなか、2004年新年早々に南オセチアを訪問するなど、その強力な愛国レトリックを一層推し進めた。そして、実に96%の得票率で当選を果たした。しかし、バラ革命を（たとえ全面的な体制転換とはいえなくとも）持続的な政権交代として決定付けたのは、政変後に起きたサアカシュヴィリ党（国民運動党）とジュヴァニア党（ブルジャナゼ—民主主義者党）との合同であった。

行動的な愛国者の姿勢を強くアピールするサアカシュヴィリは、ジュヴァニアという強力な安全弁と組むことで、絶対安定政権を手に入れることに成功した。人気度でははるかに劣るジュヴァニアであったが、サアカシュヴィリがジュヴァニアと組んだことは、強力な政権基盤構築の上で

---

<sup>43</sup> ロシア紙コメルサントは、サアカシュヴィリを革命の顔、ジュヴァニアを頭脳と評した。C. W. Blandy, "Georgia: The Death of Zurab Zhvaniya: A Setback for President, Government & Country," [http://www.da.mod.uk/CSRC/documents/Caucasus/05%2808%29-CWB.pdf]より引用。

<sup>44</sup> 11,000名の公務員給与のための基金が、UNDPやソロス財団からの資金拠出により設立された。これは3年以内にグルジア政府が払うことになる。Nodia, "Georgia," p. 71. 2004年5月23日付 Civil Georgiaによれば、8月1日より国防省の文官はそれまでの5倍の100ラリ（約50ドル）、士官は400ラリ（約200ドル）の給与を2005年から受け取るようになったとする（この時点でアメリカによって訓練された部隊員の報酬200–300ドルが、最高額であった）[http://www.civil.ge/eng/print.php?id=6986]。

<sup>45</sup> Blandy, "Georgia: The Death of Zurab Zhvaniya," p. 7.

決定的であった。それは、バラ革命の発端となった 2003 年 11 月の選挙と、革命後 2004 年 3 月に行われた出直し選挙の結果を観察すれば一目瞭然である。

2003 年秋の選挙での各党得票率推定 (%) <sup>46</sup>

政党	中央選管 発表	PVT グルジア NGO 推定	Global Strategy Group アメリカ NGO 推定
1.新しいグルジアのために Akhali Sakartvelostvis (シェヴァルドナゼ派)	21.32	18.92	14.2
2.再生 Aghordzineba (アバシゼ派)	18.84	8.13	7.3
3.サアカシュヴィリ国民運動* Saakashvili-Natsionaruli Modzraoba	18.8	26.6	20.7
4.労働者 Leiboristi	12.04	17.3	14.1
5.ブルジャナゼー民主主義者* Burjanadze-Demokrat	8.79	10.15	8.1
6.新右派 Akhali Memarjnebi	7.35	7.95	6.0
7.産業がグルジアを救う Mretsreloba Gadaarchens Sakartvelo		5.2	3.4

(なお、本文中にも記すように、\*で示したサアカシュヴィリ党とブルジャナゼ党は、バラ革命後に合流し、現在与党として多数派を形成している)

上の表にあるように、バラ革命に至った 2003 年 11 月の選挙では、サアカシュヴィリとジュヴァニアの政党は、政府発表で 27.59、NGO 予測でも多くて合計で 36.75%の支持を集めたに過ぎない。しかし、翌年 3 月に行われた出直し議会選挙では、新右派・産業ブロック (6+7) が唯一かろうじて 7%条項を突破して議席を獲得した (15 議席) もの、統一与党 (3+5) が 66.24%の得票率により残りの全ての議席 (135 議席) を手中にした。わずか数ヶ月前の選挙では、ジュヴァニアとブルジャナゼの大衆的な支持は労働者党も下回る散々たるものであったが、二つの政党が合同したことによるインパクトは非常に大きかった。

ここで、注目されるのは、90 年代初期の政治との類似性である。まず、他に選択肢がない事実上の信任投票で圧勝し、実権を掌握した後に国政選挙では少ない得票率でも圧倒的な議席を得るという方法は、まさに 1995 年に若きジュヴァニア (当時 31 歳) が与党の責任者として初めて実践した「勝利独占の方程式」の再現であった<sup>47</sup>。

<sup>46</sup> [[http://www.eurasianet.org/resource/georgia/articles/GeorgianElectionUpdate\\_Eng1.pdf](http://www.eurasianet.org/resource/georgia/articles/GeorgianElectionUpdate_Eng1.pdf)]、2003 年 11 月 20 日付 Civil Georgia 参照 [<http://www.civil.ge/eng/print.php?id=5571>].

<sup>47</sup> 1995 年 11 月 5 日の総選挙では、わずか 23.71%の得票率であった与党市民同盟が、議席のおよそ

### 3.4 アチャラ接收の光と影

こうして絶大な権力を手に入れたサアカシュヴィリ政権が挙げた最大の成果は、アチャラ（アジャリア）自治共和国のグルジア中央政府への事実上の統合である<sup>48</sup>。経済封鎖などでたびたび圧力を加えられたアバシゼは、もう一つの聖ギオルギ祭である5月5日に出国してロシアに亡命した。トルコとの国境に位置し、黒海岸の重要な港湾都市バトゥミが位置するアチャラの経済的価値は非常に大きい。また、「グルジア統一」を掲げるサアカシュヴィリ政権にとって、シェヴァルドナゼが振り回され続けたアバシゼをわずか半年で追放したことは、大きな政治的勝利であった。

しかし、政権の求心力が増す一方で、自治政府が事実上グルジア政府の管理下に入ったことは、アブハジアと南オセチアの指導部を強く警戒させ、ロシアとの関係にもマイナスの影響を与えることになった。さらに、アチャラ接收の成功と同時に、政権内部の不安定要因も露呈することとなった。アチャラ政変後に統治を任されたレヴァン・ヴァルシャロミゼは、キエフ大学の同窓でサアカシュヴィリが法相時代に局長を務めている。父親グラムは1992年にアバシゼとアチャラ海運会社を設立した地元有力者であり、息子の首相就任後まもなく地元の国営石油会社社長に就任した<sup>49</sup>。

このように、身内重用と縁故主義の蔓延や、閣僚が変わると高官もみな交代するといった「クラン」政治の要素が革命を経ても変化していないことが、（別の政治体のように認識されていた）アチャラ接收とヴァルシャロミゼ任命以降、強く意識されることになった。加えて、アチャラ出身でサアカシュヴィリの有力ブレーンであった知識人政党共和党のリーダー、ダヴィト・ベルゼニシュヴィリがアチャラを巡る争いの中で与党を離脱した。

---

半数を獲得した。これは、5%条項の導入により、61.5%が死票となったためである。Wheatley, "Elections and Democratic." 7%条項は、1999年7月に導入され、その年の10月31日に行われた選挙でも、市民同盟は41.75%の得票率で、過半数を占めることに成功した。Wheatley, *Georgia from National Awakening*, p. 159. なお、大統領選挙でも、2001年秋の総選挙ではシェヴァルドナゼ与党の責任者を務めた地方ボスが、サアカシュヴィリ派の責任者を務めた事例も報告されている。こうした流れでは、1995年から2001年までシェヴァルドナゼをナンバー2として支えたジュヴァニアの手腕が発揮されたことが想像される。

<sup>48</sup> Nodia, "Georgia," pp. 39–82. アブハジア・南オセチアとアチャラの違いはこの論文に詳しい。さしあたってここでは、アチャラの住民を他のグルジア人と分ける唯一の要素であるイスラーム信仰を強調することが、世俗主義をうたうトルコや、ロシアやアメリカの支援を得る上でも、プラスにならなかった点を指摘する。アチャラにおける世俗化によるイスラームの社会的影響の衰退については、George Sanikidze and Edward W. Walker, "Islam and Islamic Practices in Georgia" [[http://ist-socrates.berkeley.edu/~bsp/publications/2004\\_04-sani.pdf](http://ist-socrates.berkeley.edu/~bsp/publications/2004_04-sani.pdf)]にも詳しい。

<sup>49</sup> 2005年3月には与党内からも激しい批判が上がった。Zaal Anjaparidze, "One Year after the Fall of Abashidze: Ajaria Still Plagued with Governance Problems," [[http://www.jamestown.org/edm/article.php?article\\_id=2369710](http://www.jamestown.org/edm/article.php?article_id=2369710)]; "Saakashvili's Ajara Success: Repeatable Elsewhere in Georgia?," *Europe Briefing* (International Crisis Group) N°34, 18 August 2004 [<http://unpan1.un.org/intradoc/groups/public/documents/UNTC/UNPAN018787.pdf>]. なお、ヴァルシャロミゼは、ジュヴァニア派の番頭格で後継首相となったノガイデリのもとで法律事務所で働いた経験もある。サアカシュヴィリがもともとジュヴァニアによって見出されたとされているように、必ずしもサアカシュヴィリ派とジュヴァニア派が明確に色分けされるわけではない。

<sup>50</sup> 2004年8月20日付 Civil Georgia [<http://www.civil.ge/eng/print.php?id=7666>].

さらに、サアカシュヴィリ政権にとって大きな試練となったのが 2004 年 7 月に南オセチアで起きた武力衝突である。グルジア側はツヒンヴァリを砲撃できる戦略的拠点の奪取に成功したが、その間払ったつけは大きく、陣地も即日放棄することとなった<sup>50</sup>。何よりも、平和的解決を主張しながら武力的抗争に発展したことは分離勢力を著しく刺激し、周辺国の疑念も深まった。ここにサアカシュヴィリの冒険主義は冷や水を浴びせられることとなり、バラ革命以来続いた「前進イメージ」も損なわれることとなった。

## 4. ジュヴァニア死後のサアカシュヴィリ政権

### 4.1 ジュヴァニアの死

2003 年 11 月のバラ革命から僅か 14 ヶ月ばかりを経過した 2005 年 2 月 3 日未明、当時首相を務めていたズラブ・ジュヴァニアが訪問先の知人宅で死去した。政府はただちに閣僚を招集し、大統領の臨席の下、メラビシュヴィリ内相は、誤って備え付けられていたガスヒーターから漏れた一酸化炭素中毒による死亡であると発表した。アメリカの連邦捜査局（FBI）も協力して死因が追及されたが、この当初の発表が覆ることはなかった<sup>51</sup>。

約 10 年にわたってグルジア政界に君臨した大物政治家の死は、当初、サアカシュヴィリ政権に決定的なダメージを与えるとも考えられた。しかし、その死からおよそ一年半が経過した現在（2006 年 6 月）、表面的には大きな影響は出ていない。むしろ、サアカシュヴィリ政権に反対する議員の多くが、ジュヴァニアとの不和を理由に与党から反対派に回ったことを考慮すれば、野党追及が迫力を欠くのも、ジュヴァニア不在の影響といえなくもない。

サアカシュヴィリは、ジュヴァニア直系として慎重な経済政策を採るノガイデリを首相に起用し、内閣改造を小幅とすることで、当面その死の直接の影響を乗り切った。ただし、良くも悪くもグルジア政界の安全弁として信頼されていたジュヴァニアの死は、その後の国内情勢における不透明感を一層強いものとしている。

サアカシュヴィリ政権が深い傷を負った 2004 年夏の南オセチアでの軍事衝突において、ジュヴァニアは平和的解決に大きな役割を果たし、南オセチアを実効支配するココイティ政権もその

---

<sup>51</sup> 遺族はジュヴァニアの死に関する政府の調査結果を認めていない。2005 年 4 月 4 日付 Civil Georgia 参照 [http://www.civil.ge/eng/print.php?id=9505]。ジュヴァニアとともに死亡したアゼルバイジャン系若手政治家（当時 26 歳）のラウル・ユスポフ（下カルトリ県副知事）の遺族も、二人が死亡した部屋をユスポフが借りていたこと自体を否定している。2005 年 2 月 7 日付 Civil Georgia 参照 [http://www.civil.ge/eng/print.php?id=9002]。また、ジュヴァニアが死亡した直後、モスクワでグルジア系の著名なビジネスマン、マムカ・ジンチャラゼが暗殺されている。彼は、アチャラ出身でアバシゼ追放に大きな役割を果たしたとされており、グルジア政界との結びつきが強かった。British Helsinki Human Rights Group, “Georgia: Power Cut” [http://www.bhhrg.org/CountryReport.asp?ChapterID=739&CountryID=10&ReportID=242&keyword=]。

手腕を評価していた<sup>52</sup>。ジュヴァニアの死によって、サアカシュヴィリ腹心でツヒンヴァリ出身のオクラアシシュヴィリ国防相の影響力が強まったことで、政府はより強硬な姿勢をとるようになった。未だ大きな軍事衝突には至っていないが、緊張は一層強まっている。また、ロシアとの外交関係は南オセチアとアブハジアを巡って、極端に悪化し、グルジアは CIS 離脱の検討を始めた。

さらに、ジュヴァニアの死の影響は別のところでも現れた。ジュヴァニアは、サアカシュヴィリが抜擢したズラビシュヴィリ外相<sup>53</sup>と軋轢を深めていたが、その死後、ジュヴァニアに近い議員らが外務大臣の無為を激しく批判し、サアカシュヴィリはズラビシュヴィリを罷免せざるを得なくなった。ズラビシュヴィリはフランスに戻らず、グルジア政界に残ることを宣言し、自らの政治運動体「グルジアの道」を立ち上げた<sup>54</sup>。バランス感覚に富んだジュヴァニアは、ズラビシュヴィリと折り合いが悪かったものの、その生前はむしろ議会の批判の声を抑える役割を果たしていたとも考えられる。また、次に触れるように議会でも特にロシア軍が紛争解決の障害であるという強硬論が支配的になっているが、シェヴァルドナゼ流の現実主義を引き継いでいたジュヴァニアの不在は、こうした情勢にも影を投げかけているといえよう。

## 4.2 ロシアとの緊張関係と CIS 離脱問題

サアカシュヴィリ政権は、発足当時、イワノフの仲介による平和的解決（シェヴァルドナゼの辞任）を評価してロシアとの融和に努めたと考えられる<sup>55</sup>。ベンドゥキゼの抜擢も、とくに経済面でのロシアからの支援に大きく期待したものであった。しかし、アチャラ危機とアバシゼ追放を期に、関係は急速に悪化した。とりわけグルジア軍兵士 19 名の犠牲者を出した 2004 年夏の南オセチアでの軍事衝突は決定的な意味を持った。また、2004 年秋のアブハジア大統領選挙への露骨な介入は、ロシアが南コーカサスにおける既得権益を手放さず、地域のフィクサーとして今後も残り続けることを強烈にアピールしたといえる。その意味でも、バラ革命における仲介は、旧宗主国・地域大国としてのロシアの存在感をみせるためのパフォーマンスであったと改めて解釈できる。ロシアの「好意」に一瞬期待したサアカシュヴィリ政権は、国土統一に関する強硬な主張とロシアとの関係改善が相反するベクトルにある中、難しい外交を迫られることになった。

---

<sup>52</sup> 2005 年 2 月 3 日付 Civil Georgia [<http://www.civil.ge/eng/print.php?id=8963>].

<sup>53</sup> サアカシュヴィリは、2004 年に駐グルジア仏大使を務めていたサロメ・ズラビシュヴィリ女史にグルジア国籍を付与し、外務大臣に抜擢した。ズラビシュヴィリはフランスで生活する亡命グルジア人家庭に生まれ、夫もグルジア人である。2004 年 3 月 21 日付 Civil Georgia 参照 [<http://www.civil.ge/eng/print.php?id=6488>].

<sup>54</sup> ズラビシュヴィリはトビリシ市長の座に意欲を示している。2006 年 5 月 28 日付 Civil Georgia 参照 [<http://www.civil.ge/eng/print.php?id=12669>].

<sup>55</sup> トビリシの刑務所から解放されたチェチェン人が失踪し、まもなく国境でロシア側に拘束された。グルジアのチェチェン人は、これをグルジア政府がロシアに密かに身柄を引き渡したとして抗議した（ただし、グルジア政府は否定）。2004 年 2 月 26 日付 Civil Georgia 参照 [<http://www.civil.ge/eng/print.php?id=6319>].

現在、サアカシュヴィリ政権は、南オセチアの「回収」を優先課題として働きかけを強めている。駐留するロシア軍の撤退を迫ることで、南オセチアの指導部に圧力をかけているが、これはまさにグルジアの「国内紛争」が旧ソ連から継続する問題であり、グルジア国内だけの問題というより「国際」的な課題である事を示している。一方、アブハジアに関しては、鉄道再開というアメを用意しながら交渉を続けている。2006年5月トビリシでの直接交渉が久しぶりに行われるという成果はあったが、アブハジアがグルジアの中に留まるという選択を行う見通しは今のところ全く立っていない<sup>56</sup>。

苛立ちを強めるサアカシュヴィリ政権は、ウクライナらとの戦略同盟を強化しつつある。かつての GUUAM からウズベキスタンを除いた4国（グルジア、ウクライナ、アゼルバイジャン、モルドヴァ）の首脳は、2006年5月、キエフに集まり、リトアニア大統領ら東欧の代表、アメリカや OSCE の代表も参加した会議で、新機構「民主主義と経済発展のための機構 GUAM」を発足させた<sup>57</sup>。しかし、こうしたロシア離れの姿勢は、エネルギー価格の上昇のみならず、ワインと飲料水の対ロシア輸出が止められるなど、悪循環に陥っている<sup>58</sup>。

このように、国内紛争を解決して求心力を高めるために、政治的なロシア離れを加速することで、経済的な機会を失っていくという構図は、かつてのシェヴァルドナゼ政権も経験した。また、サアカシュヴィリは、エストニアでかつて首相を務めたラルを改革顧問に迎えることを発表した。すでに EU との統合に成功した東欧諸国の成功経験に学ぶという姿勢が明確である。しかし、かつてシェヴァルドナゼもポーランド中央銀行総裁バルツェロヴィチを経済顧問としながら、なんら効果的な成果は得られなかった<sup>59</sup>。

後の章でみるように、ウクライナのような与党の脆弱さも、クルグズスタンのような政治テロの続発もみられず、ジュヴァニアの死という大きな事件を除けば、グルジア社会はバラ革命以降の凧の状態を保っている。サアカシュヴィリの国民の人気は高く、野党も力のない中、サアカシュヴィリの再選の可能性は高いと考えられる。ただし、ロシアとアメリカの大統領が交代する2008年以降、注目度が下がる中で国内の不満と国外の圧力が強まり、袋小路に入っていくという、かつてシェヴァルドナゼ政権がたどった道をバラ革命政権が辿る可能性も否定はできない。圧倒的勢力の与党が、細かく分裂・分散していくという構図は、グルジアにおける社会の分節化と政党政治の未熟さを露呈してきたが、この構図が再び繰り返されるのか、注目される場所である。

---

<sup>56</sup> 2006年5月15日付 Civil Georgia [<http://www.civil.ge/eng/print.php?id=12568>].

<sup>57</sup> 2006年5月23日付 Civil Georgia [<http://www.civil.ge/eng/print.php?id=12628>].

<sup>58</sup> 2006年3月28日付 Civil Georgia [<http://www.civil.ge/eng/print.php?id=12198>]及び2006年5月6日付 Civil Georgia [<http://www.civil.ge/eng/print.php?id=12501>].

<sup>59</sup> 2006年5月10日付 Civil Georgia [<http://www.civil.ge/eng/print.php?id=12520>]及び2001年8月10日付 Civil Georgia [<http://www.civil.ge/eng/print.php?id=143>].

## 終わりに：新たな地政学の海の中で

本稿では、バラ革命にいたるまで約 15 年の年月の中で繰り返されてきたグルジアの政治状況を観察した。すなわち、バラ革命とその後の政治展開においては、グルジアの政治エリートがこの間学んできたことが、繰り返し実践されているのである。

グルジアでは、シェヴァルドナゼは西側に対する「国の顔」として、脆弱な「カリスマ」統治体制を敷いていた。サアカシュヴィリは、ガムサフルディア流の愛国主義を強調して支持を集めながら、選挙結果不正問題に端を発した「バラ革命」で実権を掌握し、前任者シェヴァルドナゼの持っていた対外的な信用度というカリスマ源をも引継いだ。

このように、サアカシュヴィリはガムサフルディアの持つ愛国者（11 月 23 日へ向けた政治アピール）と、シェヴァルドナゼの持った危機の中で現れた有能な指導者（奇しくも 1992 年、帰国後初めての選挙での得票率が、サアカシュヴィリが 12 年後に獲得した得票率と同率の 96%であった）としての二つの長所を学んだ。しかし、このハイブリッド政治家は、ファシストと揶揄されたガムサフルディアと「停滞」政治家シェヴァルドナゼの二つのマイナスイメージの陥穽にはまる危険性も有している。そして、シェヴァルドナゼが持っていたもう一つ顔、すなわち狡猾な英知に基づいた社会の重石としての安定感、ジュヴァニアの死によってグルジア政界から消滅した。

サアカシュヴィリ政権の目玉は、グルジア系の駐グルジアフランス大使ズラビシュヴィリを外務大臣に、ロシアのグルジア人オルガルヒ、ベンドゥキゼを経済大臣に抜擢するといった刷新人事と、汚職根絶による前政権からの「断絶」であった。しかし、脱税をめぐる強制捜査はすでに一段落つき、ベンドゥキゼは経済大臣を外され、2005 年 10 月にはズラビシュヴィリも議会との対立から罷免された。

バラ革命の成果について、レグヴォルドは、行政能力の向上、政府内腐敗の撲滅、犯罪組織ネットワークの寸断、アチャラにおける中央政府威信の回復、信頼できる警察の創設、徴税強化と歳入増を挙げている。しかし、これらはいくまで「継続的な革命シンドローム prolonged revolutionary syndrome」の中で行われたことであった<sup>60</sup>。

イラクへのグルジア軍増派や、ジュヴァニアの死を巡る捜査で FBI の協力を仰ぐなど、アメリカに対する依存は顕著である。大統領一期目の成果もアチャラの統合は「当然」とすれば、ロシア軍基地撤退を最大のアピールとするほかない<sup>61</sup>。ただし、ロシアの影響力の排除に努めれば努めるほど、その影におびえることになる。しかも、アブハジアと南オセチア情勢が変化しない限り、ロシアとの関係が正常化することは難しい。

---

<sup>60</sup> Robert Legvold, "Outlining the Challenge," in Coppieters and Legvold, *Statehood and Security*, pp. 1–37.

<sup>61</sup> 2005 年 5 月 30 日、グルジアとロシアは 2008 年末までにロシア軍が撤退することで合意した。Jaba Devdariani, "Georgia and Russia: The Troubled Road to Accommodation," in Coppieters and Legvold, *Statehood and Security*, pp. 153–203. 特に 190–195 頁参照。

さらに、深刻なのは、地方レベルでの改革が一朝一夕に進む可能性が少ないことである。共産党による支配は終了して久しいが、旧ソ連でもっとも共産党員の割合が高かったグルジアでは、シェヴァルドナゼ政権下でも、地方部や行政府における旧共産党エリートの支配が継続している。アチャラでは、アバシゼ追放後、かつての共産党地区委員会第一書記ミヘイル・マハラゼがサアカシュヴィリ派政党の名簿一位として出馬し、最高会議議長に就任した<sup>62</sup>。

憲法改正による行政府権限の肥大化、司法制度と行政制度の連続性、選挙制度における行政府の役割の増加、マスコミへの監視圧力の強化などは、依然として人治とトップダウンに頼りがちなグルジアの政治文化の未成熟さを露呈し、その点において前政権と連続している。

もっとも、バラ革命のもたらした積極的な側面も当然少なくない。様々な縁故関係が指摘されながらも、ソ連時代の社会経験がない若手が大統領を始め国家の主要な役職を務めている点で、グルジアは突出している。また、何よりも1980年代後半から90年代前半にかけて、多くの流血を経験したグルジアにおいて、無血で成就した政変という点においてバラ革命の意義は非常に大きいと考えられる。この背景として、グルジアの若手指導者（とくにサアカシュヴィリ）が、内側では民族的自尊心に訴えながら、諸外国からの眼差しを意図して常に振舞ったことが指摘できる。アチャラの平和裏の統合からも、少なくとも「グルジア人社会」内部では暴力的な対立を回避しようとする意思が働いたと考えられる。

ただし、「民主化革命」という旗印のその後については多くの疑問が残されている。民主化によって革命はもたらされたが、革命はさらなる民主化を約束したわけでもないし、結果として民主化が進んでいるとは到底いえない<sup>63</sup>。すでにヨーロッパは大統領への権限集中に懸念を示している<sup>64</sup>。対外的には実利を求めてレトリックを駆使し、国内では圧勝の構図で安定した基盤を構築するという政治手法も、シェヴァルドナゼ政権から連続するものである。したがって、政権維持に躍起となり、レトリックが二転三転するようになったとき、政権の正当性もまた、問われることになる。

---

<sup>62</sup> Wheatley, *Georgia from National Awakening*, pp. 200–201.

<sup>63</sup> 選挙と腐敗に関する指標が改善する一方、メディアの自由度と地方自治、司法の独立性に関する指標は、バラ革命以降むしろ悪化した。フリーダム・ハウスは、憲法改正で議会の解散権を握るなどスーパー大統領主義の傾向が顕著であると指摘している。Freedom in the World 2005 [<http://www.freedomhouse.org/research/survey2005.htm>] 及び Nations in Transit 2005 [<http://www.freedomhouse.org/research/nattransit.htm>]のグルジアの項参照。

<sup>64</sup> 2004年1月24日付 Civil Georgia [<http://www.civil.ge/eng/print.php?id=8876>].